

「いろは文庫」の英訳③ーテキスト選択の謎ー

2013年7月6日、日本英学史学会本部第483回例会 川瀬 健一

1：問題の所在：忠臣蔵を英訳するのであれば最も相応しくない「いろは文庫」を齋藤はなぜ使用したのか

齋藤修一郎と共訳者のグリーが1880（明治13）年に英訳版忠臣蔵として『*The Loyal Ronins : An Historical Romance*』を出版するに際して使用したテキストは、為永春水が書いた「正史実伝 いろは文庫」（以下は「いろは文庫」と記述する）であった。

しかしこの当時において、忠臣蔵をあつかった代表的な書物は、二つあった。一つは、様々な一次資料と事件当時の憶測を交えて史書として詳しくしるした「赤穂義臣伝」。これは様々な変形があつたが、総じて事件をその初めから最期まで時系列に沿って詳しく記したものであり、講談のネタ本としても広く使用された。もう一つは浄瑠璃や歌舞伎の芝居の台本であり、これも時代設定や配役など様々な変形があるが、代表的なものは「仮名手本忠臣蔵」である。これは時代を江戸時代から室町時代に移し替え、配役も吉良上野介を室町幕府初代将軍足利尊氏の腹心の執事・高師直に置き換え、浅野内匠頭を幕府有力御家人の塩谷判官に置き換え、事件の発端も高師直が塩谷判官の妻に横恋慕したためと変えて、事件の推移を時系列に沿って描いたものである。

これに対して齋藤が使用した「いろは文庫」は、これら二種類の本とは異なり、忠臣蔵の主な場面である「殿中刃傷」や「浅野切腹」の場面、さらには「吉良邸討ち入り」すら既知の話として省略し、物語の中心を浅野家断絶に直面した個々の家臣の苦悩に焦点を当て、しかも事件の時系列とは無関係に、それを著者の興味に従って綴ったものである。

この意味で忠臣蔵の話をお米人に紹介するのであれば、「いろは文庫」は最も相応しくないテキストであり、「赤穂義臣伝」か「仮名手本忠臣蔵」などの、「史書」か「芝居本」をテキストとして使用するのが妥当である。

忠臣蔵を英訳するのであれば最も相応しくない「いろは文庫」を齋藤はなぜ使用したのかという問題を最初に提起したのが、『*The Loyal Ronins : An Historical Romance*』という書物を日米文化交流史の中に位置づけて考察した評論家で作家の木村毅で、これは彼の著書『日米文学交流史の研究』（1960年講談社刊）の第13章「忠臣蔵とシオドア・ルーズベルト」にまとめられている。

この問題についての木村の考察を要約すれば以下ようになる。

「すでに赤穂義士の正伝に近い話は、ミッドフォードの『*Tales of Old Japan*』（1871年刊）に「The Forty-Seven Ronins」として英訳されており、忠臣蔵を文芸作品として流布させた歌舞伎の台本は、ディッケンズが『*Chushingura or the Loyal Leage*』（1875年刊）とし

ですでに英訳している。この先行の英訳本との重複をさけようとすれば必然的に第三の本、すなわち為永春水の「いろは文庫」に落ち着かざるを得ない。

この木村の考察は、すでに二種類の英訳版忠臣蔵が出版されており、これらの事実を齋藤修一郎が知っていたという事実（明治43年の「いろは文庫の英訳」一雑誌日本及日本人第524号1910・明治43年1月1日掲載一で彼自身が述べている）に依拠したものと言えよう。**※資料1参照**

しかしこれは後知恵ではないか。

齋藤修一郎が忠臣蔵を英訳しようとした時、彼の手元には「いろは文庫」以外の忠臣蔵がなかったというのが実情だと思われる。

そしてこれは、『*The Loyal Ronins : An Historical Romance*』を出版するに際して、「いろは文庫」に載せられていない事件の重要な場面やエピソードを、齋藤とグリーが如何にして補ったかということ、英文に即して検討してみるとわかることである。

2：英訳の実際

① 共訳者・グリーは語る

忠臣蔵を英訳しようとする「いろは文庫」は事件の主な出来事やエピソードをほとんど省略しており、このままでは忠臣蔵の話を知らない欧米の読者には伝わらないという問題を、齋藤とグリーは如何に克服したのか。

この点について、グリーは彼の序で明快に述べている。

このロマンスは日本人はみんな承知している事件なので、もし著者の結構の通りに訳したら、アメリカ読者には、わけが分かるまい。一為永は、彼の顧客が47浪人の話をよく知りつくしているものと前提して、創作している。そこで吾々は、章の置き換えをせねばならなかったばかりか、つながりをつけるため、著者の省略した話も挿入した。これらの材料は『赤穂四十七士伝』『誠忠義士銘々伝』その他の著作から取った。（木村毅の訳）

② 『*The Loyal Ronins*』は如何に再構成されたか？

a) 「いろは文庫」から取られた話

「いろは文庫」は、全18編・54巻・108回の話で出来ている。その中から、29回分を抜き出して英訳して話の順序に並び替えた。その結果が**資料②**である。

しかしこのままでは重要な話が欠ける。資料②の「？」を記した12章分である。

b) 「いろは文庫」にない話を如何にして補ったか？

忠臣蔵の重要な事件で「いろは文庫」が描いていない場面については他の本（「赤穂四十七士伝」や「誠忠義士銘々伝」など）で補ったという。

しかし「赤穂四十七士伝」は幾種類か存在し、幕末には「皇朝史略」を著した水戸藩の学者青山延光が文政 12（1829）年に漢文で著したものが多く読まれたようだ。しかしこの本は「義士」一人一人の伝記になっており、「忠臣蔵」の重要な事件を記したものではない。

また「誠忠義士銘々伝」は、幕末に出版された錦絵の絵本で、義士 47 人それぞれの錦絵に、名前や年齢や役職など、一人一人の情報を詳しく記したもの。この二つの本では重要な事件を補えない。ではどの本で補ったのか？

c) 先行する英訳本と「いろは文庫」で合成された第一章・第二章

第一章「剣はさやから抜かれる」は、資料 3 にあるように、三つの構成部分からなる。【A】は浅野内匠頭が勅使接待役に任じられた過程と、相役の「亀井さま」が彼の主席家老の機転で送った贈り物のおかげで吉良にいじめられずに済んだ話。【B】は、主人が勅使接待役に決まると知った浅野の家老大石が、赤穂から贈り物のための金子を使者に持たせて送ったが、江戸家老がけちをして贈り物を吉良に送らなかった話。【C】は、吉良に冷遇された浅野はついに堪忍袋の緒が切れて、殿中で吉良に切りかかった「殿中刃傷」の話。

この【B】は「いろは文庫」第 25 回の忠実な翻訳である。

では他はどこから来たのか？

【A】と【C】とは先行するミッドフォードの『*Tales of Old Japan*』（1871 年刊）の「The Forty-Seven Ronins」の冒頭部分に酷似している。※資料 5 参照

すなわち、浅野の相役を史実の「伊達左京亮（伊予吉田藩）」ではなく「亀井様」とし、彼が吉良の態度に怒って吉良を殺そうと家老に話したが、機転を利かせた家老が「殿のお気のままに」と言っておいて密かに吉良に贈り物を送って吉良の機嫌をとり、翌日吉良の亀井に対する態度が急変して事なきを得たという話。ミッドフォードの本は亀井の家老の動きを詳しく記しているが、齋藤の本はこの部分を簡潔に記述したもの。さらに決定的なのは、贈り物を送らなかった浅野に対して吉良が侮辱した話。ミッドフォードの本と齋藤の本では訳文は違っても中身はまったく同じである（左：ミッドフォード 右：齋藤）。

" Here, my Lord of Takumi, the ribbon of my sock has come untied ;be so good as to tie it up for me."	"Here, my Lord Morning-field, the string of my sock has become loosened. Tie it for me."
---	--

ただしミッドフォードの本では浅野は「田村右京大夫（奥州一関藩）」の屋敷に押し込められてそこで切腹させられたと史実に沿って語られたが、齋藤の本では、浅野は自宅に退出し、そこで謹慎せよと命令されたとなっている（第二章は自宅での切腹）。

この末尾の部分は、ディッケンズの本と酷似している。

ディッケンズの本は「仮名手本忠臣蔵」の忠実な英訳のため、塩谷判官は自宅謹慎を命じられ、そして自宅で、彼の妻・顔世御前と家来たちが送られた桜の花の鉢植えを見なが

ら、事件の背景と善後策を協議している所に城中から使節がやってきて、塩谷に切腹を命じ、命を受けた塩谷は、期待した大石の到着を待ち切れずに、短刀を腹にあてたが、そこに折よく間に合った大石に看取られながら事切れる形になっている。

これに対して『*The Loyal Ronins*』の第二章は、資料4にあるように、浅野が庭の万両の盆栽を見ながら詩作しかつ大石への遺言を書いているところに、妻の顔世が現れ、運命を嘆く妻に浅野が、大石の言葉をわが言葉として信じよと命じ、そこに到着した城中からの使者の命によって浅野は見事に切腹して果てる。ただしその直前に家来に書付を渡していた（これが大石への遺言：この遺言書が大石にもたらされるのが第5章の冒頭部分）。つまり第二章は、ディッケンズの本の塩谷館の情景の冒頭を、顔世御前と塩谷の家来の会話から、「いろは文庫」巻4の冒頭に掲載された万両の挿絵を巻4の冒頭7回と8回の塩谷の妻顔世御前を大石が討ち入り前夜に尋ねる話に関連させて解釈して浅野と妻顔世御前の会話に変更し、後半の切腹の場面はディッケンズの本の情景を踏襲しながらも、大石は登場させずに、彼への遺言を家来に託す形に変えて、史実に近い形に改作している。

つまり『*The Loyal Ronins*』第1・2章は、先行する二冊の英訳本と「いろは文庫」の挿絵と部分的な話を参照して、「いろは文庫」が省略した重要な場面を再構成してつくりあげているわけである。

d) 他の章はどのようにして再構成したのか？

- ミッドフォードの英訳本を参照した章：第12章「吉良卿」第13章「大石卿は離婚する」
第34章「仇討」
- ディッケンズの本を参照した章：第22章「高貴な平原氏」
- ミッドフォードの本に掲載された浅野の墓前に捧げた文書とディッケンズの本の挿絵を参考に創作した章：第38章「香をたく」
- 「いろは文庫」の部分的な話や挿絵に依拠して齋藤らが創作した章：
巻16 冒頭の挿絵に依拠し配役を変更した：第9章「二人の顧問官の卑劣な振る舞い」
巻45 第89回の大石の手紙と挿絵に依拠：第27章「大石卿は妻に償いをする」
巻40 冒頭の大石時世の句に依拠して創作：第39章「浪人らと主君の再会」
- 齋藤らが創作した章：第18章「不破卿は正義の行為を行う」
第25章「泉岳寺の会合」
第40章 国外追放者の帰還

3：結論

以上の分析に見るように、齋藤とグリーンが「いろは文庫」が省略した話を復元する際に参照した「他の本」とは、先行する二冊の英訳本であった可能性が高い。つまり齋藤らが忠臣蔵を英訳しようとしたとき、彼らの手元にあった日本語の忠臣蔵で使えるのは「いろは文庫」しかなかったということ。ここに彼らが英訳に苦心した原因があったわけだ。